

第十五章

完璧すぎる模範は、しばしば進歩を促すどころか妨げる——ゴドウィン氏の論文「吝嗇と浪費」——社会に必要な労働を万人に円満に分担させることは不可能——労働を悪しざまに言う言説は、将来の利益をほとんど、あるいはまったく生まないのに、現実には有害な影響をもたらしかねない——農業労働への投入が増えることは、労働者にとって常に利益となる

ゴドウィン氏は『探究者』の序文で、『政治的正義』執筆当時とは見解が変化したことをうかがわせる言い回しをいくつか用いている。『政治的正義』の刊行からすでに数年が過ぎていることを踏まえれば、私の批判や議論は、著者自身がのちに修正した見解に向けられていたとも言える。それでも『探究者』に収められたいくつかの論考には、同氏特有の思考が、かつてと同じ明瞭さと変わらぬ鮮烈さを保ったまま、今なおはっきりと示されている。

何事も完全ではないとしても、つねに最も完全な手本を掲げるのが得策だという考えは、これまで繰り返し主張され、広く受け入れられてきた。だが著者によれば、これは見かけほど一般的には当てはまらない。ごく典型的で身近な場合でさえ例外がある。若い画家にとっては、完成度のきわめて高い名画や完璧な大作を模写するよりも、輪郭が明確で、筆致や絵の具の運び、色の置き方が読み取りやすい作品のほうが、はるかに学びやすく有利なのである。さらに、その手本としての完全さが、私たちの自然な発達の道筋とは質を異にする、より高次の性質に属するものであるなら、私たちはそこへ近づくことさえできない。そのような過度に完全な手本に視線を固定すればするほど、本来達し得たはずの進歩を自ら妨げ、失ってしまいかねない。飢えや睡眠といった生理的欲求から解放された高度な知的存在は、人間に比べればはるかに完全だろう。けれども、人間がそれに倣おうとしても到達は望めず、到底まねできない対象を無理に追えば、せっかく伸ばそうとしていたささやかな知性の芽さえ損ないかねない。

ゴドウィン氏が思い描く社会の姿は、これまで存続し優勢を保ってきたどの社会とも本質的に異なっている。その隔たりは、飲食や睡眠を必要としない存在と人間との違いにも比すべきものである。現行の枠組みや制度の範囲内でいかに改良を重ねても、その

社会像には近づきようがない。直線と平行に進んでも、その直線に一步も近づかないのと同じである。だからこそ問うべきなのは、その社会像を北極星として仰ぐことが人類の向上を促すのか、それともかえって遅らせるのかという点である。筆者の見方では、氏は『探求者』所収の「吝嗇と浪費」において、この問いに対し、自説に不利な結論をみずから示してしまっている。

アダム・スミス博士は、個人も国家も倹約によつて富み、浪費によつて貧しくなると説き、倹約家を国の友、浪費家を国の敵だとみなした。理由は明快である。収入からの貯蓄は資本として蓄積され、通常は非生産的労働への支出を減らし、その分を生産的労働の維持に振り向けるからであり、この見解は疑いなく妥当である。これに対し、ゴドウィン氏の論考は一見よく似ていながら、肝心な点で異なっている。氏は浪費の害悪を前提に「金をため込む人」と「収入を使う人」とを比較するが、そこで想定されている「ため込み型」は、国家の繁栄との結びつきという点で、スミス氏の言う倹約家とはまったく別種の存在である。倹約家は利益を増やすために所得を節約して資本を積み増し、その資本で生産的労働を雇うか、同じ目的で資金を必要とする他人に貸し出す。資本として用いられる富は、所得として消費される場合に比べて、より多く、しかも価値の高

い労働を動員しうるため、国全体の資本を増やし、利益をもたらす。他方、氏の言う「金をため込む人」は、富を金庫に眠らせたままにし、生産的な労働も非生産的な労働も動かさない。この違いは本質的である。したがって、スミス氏の主張は明らかに正しく、ゴドウィン氏の結論は明らかに誤りと映る。もともと、労働を維持するための資金が金庫に滞留すれば、貧しい人びとに当面の不都合が生じるのは明らかであり、その点は氏にも見えていたはずである。そこでゴドウィン氏は、この反論を回避するために、比較の観点を変えている。すなわち、両者を現在の社会への影響ではなく、氏が「北極星として常に念頭に置くべき」と述べる教養ある平等で幸福な社会の到来を、どれほど早めるかという観点から比較するという方法を採用したのである。

前段で述べた通り、筆者は、そのような社会は実現しないと論じた。では、その手の届かない理想を、政治という航海における北極星として掲げ続けたらどうなるか。理に照らして考えれば、答えは明らかである。向かい風はやまず、労苦は実らず、難破が相次ぎ、その結末は必ず不幸に終わるだろう。私たちは完璧な社会に一步たりとも近づけないばかりか、本来進むべきではない方向へ労力を注ぎ込み、その結果として失敗が重なり、その累積がもたらす度重なる困窮によって、現実には達成しうる水準での社会改善

の歩みさえ妨げられてしまうのである。

これまでの検討から、ゴドウィン氏の構想する制度や体系に基づく社会は、自然法則の帰結として、所有者階級と労働者階級という二つの階級に行き着かざるをえないことが分かる。そして、社会の原動力である利己心を博愛に置き換えたところで、その美名にもかかわらず、期待された幸福も効果も生まれず、現在是一部にとどまっている欠乏や窮乏の重圧が、社会全体に広がるだけである。したがって、人間の英知のすぐれた発露や最高度の知恵の働き、繊細で品位ある豊かな感情、そして文明を未開や野蛮から隔てるあらゆるものは、確立された財産の秩序・制度・管理と、一見狭量に見える利己心の原理とによって支えられている。文明社会に生きる人間の本性は、現在も将来も、自ら到達した高みに上るのに用いたはしごを、安全に捨てたり外したりしてよいと言いつけるほどには、変化していかないのである。

未開の段階を脱した社会では、所有者階級と労働者階級が必然的に形成される。労働が労働者階級にとって唯一の財産である以上、その価値が下がればこの階級の所得が減少するのは明らかである。貧しい人が他人に頼らず自立して生計を立てる手段は、自らの労働力を提供することだけであり、それが生活必需品を得るために市場に出しうる唯

一の商品となる。したがって、その商品が取引される市場を狭め、労働需要を減らし、唯一の財産の価値を引き下げることが、当人の利益にかなうとは言えない。

本書の要点は、所有者階級と労働者階級という二階級の併存が必要だという一点に尽きる。現に見られるような過大な資産格差が、社会にとって不可欠であるとか有益であるとは考えない。むしろ格差は害であり、それを助長する制度は本質的に有害で、政策としても正当化できない。ただし、格差是正を目的として政府が積極的に介入することが、社会全体の利益にかなうのかどうかは、なお不確かである。アダム・スミス博士や仏国の重農主義者が唱えた完全自由の体制を、種々の制限を伴う統制的な制度へと置き換えるのが賢明だとまでは言い切れない。

ゴドウィン氏は、物々交換や取引の制度全体を卑俗で不公正な営みとみなし、貧困者を実質的に救うには、厳しい見返りを求めることなく、彼らの労働の一部を自分が肩代わりするか、金銭を与えるべきだと説く。しかし前者については、富裕層がこの支援に応じたとしても効果には限りがある。富裕層は自己の利益を優先しがちなうえ、人数の上でも貧困層より少なく、肩代わりできる負担はごく一部にとどまるからである。仮に贅沢品部門の労働をすべて必需品の生産に振り向け、必要な労働を皆で公平に分け合う

ことができれば、一人当たりの負担は軽くなりうるが、その分担を実現する現実的な仕組みは見いだせない。さらに、厳格で公平な規準に基づく慈善を徹底すれば、かえって人類全体を欠乏と悲惨に陥れることは、すでに示されている。そこで、所有者が自分の取り分だけを残し、残りを対価としての労働を求めることなく貧者に与えた場合の帰結を考えてみると、この措置が一般化すれば怠惰や悪徳を生み、土地の生産や贅沢品部門の労働を減らす危険が大きいことはひとまず措くとしても、なお別の異論が残る。

ゴドウィン氏は、実務に根ざした実践的な原則を、十分には重んじていないように見える。私の見るところ、たとえ最善には及ばなくとも、その実現の手立てや進め方を具体的に示す人のほうが、人類にとってはるかに有益である。現に存在する社会の欠陥やゆがみを論じ、別の社会の利点を称えるだけで、前進や移行を加速するためにすぐ使える具体的な実行手段を示さない人びとより、はるかに価値があるからである。

人口の原理によれば、需要はつねに、供給が行き渡りうる水準を上回っている。ある富者の余剰で養えるのは三人にすぎないのに、実際に助けを求めてくる者は四人いる、といった具合である。彼はその四人のうち三人を選ばざるをえない。選ばれた三人には大きな恩義の意識が生じ、自分は彼に深い負い目を負い、その扶助に生活を頼っている

のだと感じる。富者は自らの力を、貧者は自らの依存を強く意識するようになり、そのような意識が心にもたらす悪影響については、広く知られているところである。だからこそ、過酷な労働の害についてゴドウィン氏の見解に全面的に同意しつつも、私は、依存の害の方がなお大きく、人の精神をより深く貶めると考える。人類の歴史は、権力を手にした者の精神が、つねに危険にさらされてきたことを繰り返して示している。

現代社会では、とりわけ労働需要が高い局面において、働き手が提供する一日の労働は、雇い手の支払う対価に見合う価値として正当に報われるべきである。雇い手は賃金を支払い、働き手は労働力を提供し、互いに必要とするものを円滑に交換する。取引は円満に行われ、貧しい人びとも自立の誇りを保ったまま胸を張って歩くことができ、雇う側も優越感におごって権力を振りかざすことはない。

三百年から四百年前の英国では、人口に見合う仕事は明らかに不足しており、生活の糧を大領主に仰がざるをえない度合いは、はるかに高かった。もし製造業の導入と発展がなければ、貧しい人びとは領主からの一方的な施しに頼るしかなかっただろう。しかし製造業によって、彼らは自ら生産した製品を領主の供給する食料と交換できるようになり、この経済的な対等性が今日の市民的自由の基盤となった。たとえば商業や製造業に

強く反対する者であっても、また筆者自身がそれらの熱烈な支持者でないにせよ、これらが英国にもたらされたとき、それに続いて自由が広がり、根付いていったという事実は否定しがたい。

ここまでの議論は、博愛の原理の価値を少しも損なうものではない。博愛は、人の心に宿る最も高貴で神に近い資質の一つであり、おそらく自己愛に由来し、やがて一般法として働き出して、その「親」である自己愛の偏りを和らげ、粗さを正し、しわを伸ばす。この関係は、自然全体に見られる対応関係にもあてはまる。自然の一般法則は、少なくとも私たちの目には、しばしば何らかの部分的な害を伴うように見えるが、同時に、その第一の法則による不均衡を補う別の一般法が、寛大な備えのように働いている場面を、私たちはたびたび目にする。

博愛や慈善や善意の役割は、自己利益が生み出す弊害の一部を和らげることであって、自己利益そのものの代わりを務めることではない。仮に、誰もが、自らの行為が他のどの選択肢よりも公益にかなうのだと完全に確信できるようになるまで、行動を先送りするとしたら、最も洞察に富む人でさえ判断に迷って足を止め、洞察に乏しい人びとは、しばしば重大な誤りを犯し続けることになるだろう。

ゴドウィン氏は、農業に不可欠な労働を皆で公正に分担するための現実的な指針を示していない。それにもかかわらず、貧しい人を雇う行為を一律に非難するなら、実現可能な善を追いながら、目の前で重大な害を生むことになる。もし貧しい人を雇う雇用者を敵視し、圧迫者とみなし、支出する人より蓄財家を高く評価すべきだと言うのであれば、社会の利益のために多額の支出をしている人々を、蓄財家へと転じさせるべきだという結論になってしまう。例えば、それぞれ十人を雇っている十万人が、富を社会での使用から引き揚げて死蔵すれば、百万人の労働者が職を失うのは明らかである。この窮状は同氏にも否定できないはずであり、蓄財家のふるまいが、支出する人々のふるまいより、人々の暮らしをより良くすると証明するのは難しい。ところが同氏は、蓄財家は何も閉じ込めてはいないのであって、富の定義が誤解されているのだと主張する。もし富を、人間の労働が生み出し維持する財と定義するなら、蓄財家は穀物や牛、衣服や家屋を閉じ込めているわけではない、というのである。だが、彼が封じているのは、それらを生み出す力であり、実質は同じである。これらの財は、彼が物乞いであったとしても、同時代の人々に消費されるには違いないが、富を投じて耕地を広げ、牛を増やし、仕立て職人を雇い、家屋を建てる、といった規模には到底及ばない。仮に蓄財家の行い

が、有用な産出を少しも抑えないのだとしても、職を失った人々が、衣食の正当な取り分を請求する権利を、どのようにして根拠づければよいのか。ここに、克服しがたい難問が残る。

ゴドウィン氏の指摘のうち二点は認められる。すなわち、世の中には必要以上の労働が多く存在すること、そして、下層の人々が一日に六、七時間以上は働かないと取り決めたとしても、人間の幸福に不可欠な必需品は、現在と同程度の豊かさでまかなえるだろうという点である。とはいえ、その取り決めが長く守られるとは考えにくい。人口の法則が働くかぎり、他の人びとより切迫した需要を抱える者が必ず現れ、ある部分は必ず他の部分より困窮する。大家族は、より多くの生活の糧を得ようとして、自然と労働時間をさらに二時間延ばし、その見返りに、より多くの生活必需品の分け前を求めるだろう。では、それをどうやって止めるのか。制度や法令によって個人の労働に対する処分権に踏み込むとすれば、人間が持つ最も基本的で不可侵の財産、すなわち自分の労働を自ら支配する権利を侵すことになる。

したがって、ゴドウィン氏が、社会に必要な労働を公平に分担するための実効性ある計画を示さないかぎり、彼の辛辣な労働批判に従ってみても、氏が北極星になぞらえて

将来の目標とし、当面は人間の行為の性質や傾向を測る指針として掲げる「文明的な平等」に、社会が近づくことはない。むしろ、目先の重大な害を確実に招くことになる。

そのような星だけを頼りに航海する者は、難破や座礁に見舞われ、ついには船を失う危険にさらされるのである。

富の最も有効な使い方は、国家にとっても、とりわけ社会の下層の人びとにとっても、採算の取れない土地を改良し、生産に組み入れることである。もしゴドウィン氏が、貧しい人びとの消費をぜいたくに回すのではなく、この方法で人びとを雇用することの価値と公共性を強調していたなら、識者から高く評価されたにちがいない。農業労働への需要が増えれば、貧困層の暮らし向きは着実に向上する。しかも、増える仕事がこの分野であるかぎり、同じ賃金を得るために労働時間を八時間から十時間に延ばさざるを得ないという指摘は当たらず、むしろ八時間ではなく六時間の労働で家族を養っていけるだろう。

贅沢が生む雇用は、国産品の普及を促しながらも、所有者の権力を増長させたり、労働者の尊厳を依存関係によって損なったりはしない。他方で、その利益が貧困層にまで等しく行き渡るとは言いがたい。製造業の仕事が大幅に増加すれば、賃金は農業労働へ

の需要の伸びを上回るかたちで上昇しうるが、食料供給が同じ割合で増えるとはかぎらず、物価、とりわけ食料価格が賃金に連動して上昇するため、貧困層が受ける恩恵は長続きしにくい。この点に関連して、政治経済学で高く評価されてきたアダム・スミス博士の『国富論』の一部について、先行する評価に異を唱えるにあたり、ここでは十分な慎重さをもって見解を述べることにしたい。